

主日礼拝説教「それはだれのものか？」

日本基督教団石神井教会 2019年2月10日

【旧約聖書日課】出エジプト記 20章8～11節

⁸安息日を心に留め、これを聖別せよ。⁹六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、¹⁰七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。¹¹六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一 3章18～23節

¹⁸だれも自分を欺いてはなりません。もし、あなたがたのだけれが、自分はこの世で知恵のある者だと考えているなら、本当に知恵のある者となるために愚かな者になりなさい。¹⁹この世の知恵は、神の前では愚かなものだからです。

「神は、知恵のある者たちをその悪賢さによって捕らえられる」と書いてあり、²⁰また、

「主は知っておられる、知恵のある者たちの論議がむなしきことを」とも書いてあります。²¹ですから、だれも人間を誇ってはなりません。すべては、あなたがたのものです。²²パウロもアポロもケファも、世界も生も死も、今起っていることも将来起こることも。一切はあなたがたのもの、²³あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものなのです。

【福音書日課】ルカによる福音書 6章1～11節

¹ある安息日に、イエスが麦畑を歩いて行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。²ファリサイ派のある人々が、「なぜ、安息日にはしてはならないことを、あなたたちはするのか」と言った。³イエスはお答えになった。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。⁴神の家に入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか。」⁵そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」

⁶また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎えていた。⁷律法学者たちやファリサイ派の人々は、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。⁸イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。⁹そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」¹⁰そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった。¹¹ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った。

「立って、真ん中に出なさい」

先週、わたしたちの教会では二人の方の葬送を行いました。お二人は、同じ月曜日に、一人は早朝未明に、もう一人は午後に、それぞれ生涯の日々を終えられました。葬送の式も、木曜日、金曜日にかけて続けて、執り行わせていただくこととなりました。お一人は長く教会生活を重ねられた教会員、もう一人は教会員のご家族ですが礼拝の生活はごく一時期のみで洗礼を受ける機会もなかった方でしたが、教会の皆さんがお二人を同じように覚えてくださり、多くの教会員方が葬送の礼拝に加わってくださいました。

葬送の式で、地上で与えられた肉体をもって最後の礼拝にあずかれる人を、わたしたちは、礼拝堂の真ん中に、会衆席の一番前に、お連れします。まさに今、礼拝で皆さんがお座りになされているただ中に、棺に納められた人をご案内するのです。もちろん、その人は棺の中で横たわっています。礼拝堂の後方を頭にしておいて、聖壇側に足を向けて、棺の中で横たわっているその人は、しかし、主がお呼びくださって起き上がるならば、皆と一緒に讃美を歌い始めるはず。そう信じて、葬送の式は行われました。

今日の福音書（ルカ 6 章）で、主イエスは、礼拝のために会堂に集まって来ていた人々の中の一人に向かって言われました。「立って、真ん中に出なさい」＝「起き上がって、真ん中に出で立ちなさい」（私訳）。

その人は、手が萎えていたのです。安息日の礼拝のために、他の人たちと共に会堂に来てはいましたが、手が使えなければ礼拝の所作に不自由があったことが想像されます。成人男子であれば順に当てられるはずの聖書朗読の役割も、巻物を手にもって扱うことができなければ、外されていたに違いありません。そこにいながら、礼拝に積極的に加わることなく座り込んだままか、無為に横たわっていたのではないのでしょうか。その人に目を留められた主イエスは、彼に向かって言われたのです、「起き上がりなさい、真ん中に立ちなさい」と。

人の目には、もはや皆と一緒に礼拝に参加することが難しいと思われることがあります。それでも、だれかに助けをもらい、手を引いてもらい、あるいは車椅子を押してもらい、加わることができるはずで、主が、「起き上がりなさい。この礼拝の営みの真ん中に立ちなさい」とお呼びくださっているのです。

もちろん、本当のことを言うならば、自分の足で教会まで歩き、だれの手も煩わさずに礼拝に加わっているつもりでいるわたしたちも皆、同じように主に呼ばわれて来たのでしょうか。本当は、日曜日の朝、いつまでも布団の中に留まっていることもできたのに、家の中で寝転んでテレビを見ていることもできたのに、わたしたちは、主にお呼びいただいて、起き上がってきました。そして、礼拝の営みの真ん中に立つ者としていただいて、今ここにいるのではないのでしょうか。

そうであれば、わたしたちは、生涯の終わりまで、ここに呼ばわれていることから離れることはできないでしょう。たとえ自力でここに来ることができなくなるときが訪れても、わたしたちは皆、最期まで、主に呼び出され、ここに立つ者とされていることは、決して変わらないのです。

「主の安息日」

日曜日の朝、起き上がって、出て来て、教会の礼拝にお立ちくださっている皆さんは、なんと幸いなことでしょうか。今ここに集うことを願いながらも、かなわない方々は少なくないのです。そればかりか、主のお呼びくださっていることを知らず、ここに集うことを願うなどということをもまったく知らずに過ごしている人の、なんと多いことでしょうか。

もちろん、わたしたちは、ここに来ることができずにいる人たちを責めようというのではないのです。ましてや、礼拝に加わることなど考えたこともない多くの人々のことを、神を知らぬ不信仰な人々として軽蔑するようなことを、わたしたちは決してすべきではありません。何となれば、主イエスが、安息日の会堂で、敢えて手の萎えた人を呼ばれ、真ん中に立たせられたのは、礼拝に参与できない人を責める者たちや、不信仰な人々を軽蔑する者たちを前にしたからではなかったのではないのでしょうか。

「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは…何か」。

「安息日」は、旧約聖書の第二巻「出エジプト記」（今日の旧約日課）で命じられている、週の第七日、つまり土曜日に定められた礼拝の日です。「**七日目は、あなたの神、主の安息日である**」と定められて、この日には「**いかなる仕事もしてはならない**」と命じられています。創世記1章に物語られる天地創造で、六日の間に創造の御業をなされた神が、「**七日目に休まれ**」て、「**安息日を祝福して聖別された**」のです。もちろん、天地創造の七日目に、神がどのように休まれたのかは、分かりません。むしろ大切なことは、六日の間の御業を神が完成されたので、その完成された御業を祝われたということ、そのことを記念するときとして「安息日」が他の日と分けて「**聖別され**」ているのだということでしょう。

現代人のわたしたちは、「週に六日も働くのは働きすぎだ」と言うかもしれません。確かに、現代人に課せられている仕事は、週に二日を休息に充てなければ心身の健康を保てないようなものなのかもしれません。

もちろん、聖書が「**六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし**」なさいと告げるのは、わたしたちが報酬を得るために時間の切り売りをして行っている労働や仕事ばかりを指しているわけではないでしょう。そのようなことも含めて、すべてわたしたちが自分自身で行い、働き、為さんとしていることを指しているでしょう。それを、喜んでしているか、強いられて嫌々こなしているか、それは様々かもしれません。同じことでも、人によって、状況によって、働きや仕事に対する心向きは、異なるものです。しかし、それが「**何であれあなたの仕事をし**」なさいというのです。

わたしたちは、勤勉を求められているのでしょうか。いいえ、それは、「**七日目**」を「**主の安息日**」とするためではないのでしょうか。神の創造の御業の完成を記念する安息日に、わたしたちも、六日の間為してきたことを、完成していただくためではないのでしょうか、神の御業として、神のための御業として。

「安息日の主」は？

わたしたちは、しかし、「安息日」を守る習慣を、厳密には受け継いでいません。聖書の教える「安息日」は、週の「第七日」すなわち「土曜日」のことです。ユダヤ人の古い習慣に従えば、「一日」は「日没から、翌日没まで」ですから、「安息日」は、「金曜日の日没から土曜日の日没まで」となります。「日没」から新しい一日が始まるという習慣は、キリスト教会にも部分的に受け継がれていますが、「安息日」の習慣は受け継がれませんでした。「安息日」に第一に為されるはずの「礼拝」を、キリスト教会は「週の初めの日」すなわち「日曜日」に行なうようにしてきたからです。

教会の最初の時代には、「安息日の礼拝」を守りながら、それに加えて「週の初めの日」を「主の（復活の）日」として記念して新たな礼拝の営みをしていたようです。数世紀の間、「安息日」と「主の日」を併用する習慣の人々は少なからずいたようです。4世紀にローマ帝国がキリスト教をはじめとする諸宗教を公認したとき、皇帝は、「日曜日」をすべての宗教の「礼拝日」とするために「休日」にすることを命じたのです。それは、教会の礼拝日が完全に「主の日」に移行することを意味していました。「安息日」は、教会の歴史の中で、「主の日」が取って代わった、と言われるわけです。キリスト教会にとっては、「主の日」が「安息日」なのだ、というわけです。実際、以前は、日曜日の礼拝を励行する言葉として「安息日厳守」という文字が週報等に載せられている教会が、少なくありませんでした。

けれども、500年前の宗教改革者は、こうも言いました。「日曜日は、この世の生涯において《永遠の安息日》を始めることである」（「ハイデルベルク信仰問答」第103問の答えより）。「安息日」が「日曜日」に移されたのが「主の日」であるというわけではなくて、「日曜日」を「主の日」として祝うようになったことで、すべての日を「安息日」として生き始めているのだ、というのです。

「主の安息日」の定めを守ること、「安息日」として「主の日」の教会の礼拝を厳守すること。それも貴いことかもしれません。けれども、主イエスがファリサイ派の人々を前に嘆かれたように、わたしたちは、「主の日」の教会の営みを重ねる中でも、この日が何のための日なのか、何が大切にされるべきなのか、見失いがちなのです。この日は、誰のための日なのか。この日、わたしたちは、だれのために生きるように導かれているのか。

「安息日」の前の金曜日に十字架につけられて死なれた主イエスは、「安息日」を超えて日曜日に、「復活」という新しい御業へと目を向けさせてくださいました。この日から始まる週の日々を、主の御業の為される日々として憶えるようになるため、です。実のところ、「六日間」どころか「七日間」すべてを「わたしのもの」としたいと考えるわたしたちです。そのわたしたちのために、「安息日の主」は、「主の日」を始めてくださったのです。それは、「永遠の安息日」の始まりを告げる日です。この日から、「わたしのもの」がすべて、神の御業の中で、「神のもの」として記念されるようになるのです。